

# 100年カンパニーの知恵。

アライプロバンス 田

since 1903

面が2階に上がることができ、スロープを設置。最大4テナントが利用でき、各区分にはそれぞれ荷物用エレベーターと垂直搬送機を備える。

近年使われるようになった物流用語に「ラストワンマイル問題」がある。電子商取引（EC）が進んで激

動のまった中にある物流業界において、首都圏で商品を届ける最終地点が不足していることを指す。この「ラストワンマイル」に名前を上げた企業の一つが、アライプロバンス（東京都墨田区）だ。

## 不動産事業で第2の創業

千葉県浦安市に所有する約1万5000平方メートルの敷地に鉄骨造の4階建て、延べ床面積約3万5000平方メートルの「浦安市港物流センター」（仮称）の建設が急ピッチで進む。首都高湾岸線浦安インターチェンジまで約3分。東京駅は20分圏内だ。物流の一等地と言われ、限られた土地しかない浦安で大規模開発は今なぜ可能なのか。

新井太郎専務は「当社の前身である旧新井鉄工所の工場跡地を利用して、新たな事業ができないかと考えた。その結論が物流施設を建設し、ラストワンマイル問題に貢献することだ」と、2020年7月に着手し、今年10月に完成予定だ。車



物流倉庫の建設現場を案内する新井太郎・アライプロバンス専務＝千葉県浦安市港で、松田嘉徳撮影

# 100年カンパニーの知恵。

アライプロバンス 田

since 1903

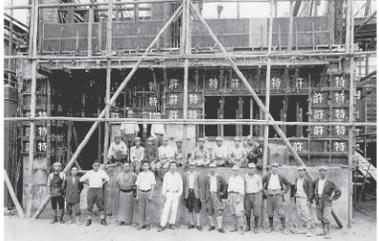
式会社化し、37年には当時としては珍しい鉄筋コンクリート造りの本社ビルが完成。空襲でも焼け残った。石油掘削機器の製造を始め、53年のこと。技術力が海外で評価されて、飛ぶように売れ、この事業に特化していく。

2016年に石油掘削機器の製造販売事業から撤退した旧新井鉄工所は、20年7月、社名を「アライプロバンス」に変更し、総合不動産会社として再スタートした。物流・不動産事業に参入するにあたり、新井嘉喜雄社長はこんなメッセージをホームページに掲げた。「時代と社会の変化に対して柔軟かつダイナミックに。これが100年の刻を経て辿り着いた新井の答えです。」

## 石油掘削機器輸出で成長

創業者の新井久次郎が1903年、新井鉄工所を設立した当初は、はさみを手作業で作ったり、車の発注で馬の蹄鉄などを製造したりする小さな工場だった。事業は景気の波に左右され、倒産の危機に何度かさらされたという。そんな中、久次郎は温泉井戸掘削事業を新たに始めた。妻がハイヤー会社を設立したり、夫婦ともチャレンジ精神が旺盛だったという。

23年に関東大震災が起きると、復興需要で経営が軌道に乗る。船のスクリーニングなどを製造するようになった。代替わりして35年に株



建設中の旧新井鉄工所の本社ビル＝東京都墨田区で1936年(アライプロバンス提供)

# 100年カンパニーの知恵。

アライプロバンス 田

since 1903

った。これを本拠地として「城東」と呼ばれる地区を中心に、物流施設・マンション・オフィスビルの開発運用、不動産の売買・仲介・コンサルティング事業などにあたる。創業者が拠出した公益財団法人新井財団は、歴史的建造物や伝統的街並みの保存・修復・再生事業に助成する。

総合不動産会社として生まれ変わったアライプロバンス（東京都墨田区）は、最寄りの錦糸町駅前のビルに1月27日、「ARAI PROVANCE」と書かれた巨大な看板（縦11・6メートル）を掲げた。「地域の発展に貢献する」との決意を示すものだ。私たちはこの地域で事業を100年以上営み、街の歴史や文化を熟知している。中町の粋を大切に、街そのものをブランド化していきたい」と新井嘉喜雄社長。

## 常に挑戦の心で地域に貢献

浦安市に続き、東京都江戸川区に所有する広大な工場跡地（5万7000平方メートル）で倉庫の建設計画を進める。2025年に着手予定で、地域を代表する物流施設を建設する意気込みだ。第2の創業に挑戦できるのも「100年カンパニー」の力なのかもしれない。（この連載は沢田石洋史が担当しました）



アライプロバンスの新井嘉喜雄社長＝東京都墨田区の本社前で、松田嘉徳撮影